神戸新聞
KOBE SHIMBUN
（神戸）
'18.2.25

534

ひと探訪

末期患者と共に生きたい

チャプレン・カウンセラー　沼野（ぬまの）　尚美（なおみ）さん

白衣は着ない。私服姿で病室を訪ねる。

「白衣を着ると、患者さんと上下関係ができてしまう。『してあげる』とか『援助する』ではなく、私は、ともに生きたい」

末期がん患者向けの「宝塚市立病院緩和ケア病棟」＝同市小浜＝で、2010年から「チャプレン（宗教的援助者）・カウンセラー」として働く。

仕事内容は「患者さんと家族、遺族、病棟スタッフの心のケア担当」だ。宗教的な援助を求める人には聖書の言葉を紹介し、そうでない場合はカウンセラーとして寄り添う。

もともとは薬剤師だった。武庫川女子大薬学部を卒業し、病院に勤務していたときのこと。投薬指導で訪れた大部屋で、入院中の女性たちがそれぞれの人生を語り、心の痛みを打ち明け合うのを耳にした。

そして、ある高齢女性が言った。「人には心があるんです。喜びや希望がないと、いきいきと生きていけない」。心のケアの必要性を感じ、転職を決意した。

薬剤師の仕事を離れた後、神学や心理学を学んだ。関西で初めてホスピスを設けた「淀川キリスト教病院」（大阪市）を始まりに34年間、計10カ所の病院で勤務し、3千人以上の患者と接してきた。宝塚市立病院では全15室を回る。

死と向かい合う患者は、家族や仕事、人生を語る。反省も後悔も。「死にたくない」という思いや、葛藤や苦しみに寄り添ってきた。

「語りを引き受け、分かち合うことで、患者さんの心が少し楽になる。『話して良かった』と感じ、背負う荷が軽くなれば」

そして、相手から教えられることもあると力を込める。「今をどう生きるか。患者さんは私たちに生きる意味を教えてくれている」。61歳。

（記事・写真　中島摩子）

メモ

1956年、大阪市生まれ。宝塚市立病院のほか、県内2カ所の病院で勤務する。全国各地で講演し、著書に「生と死を抱きしめて」（明石書店）などがある。大学4年の22歳でキリスト教の洗礼を受けた。